

書評

著：茨木 保
まんが 医学の歴史

書評者：諏訪邦夫(帝京大学短期大学教授・麻酔科学)

著者のいう「端っこにひっそりおかれる」医学史を、関心の中央へ持ち出すことに「まんが」を使って見事に成功し、それを医師自身が実行しているのが本書の成果です。まんが自体が美しく無理がなく、楽しい出来映えで、「医学史の入門のまた入門のつもり」と謙遜していますが、どうしてどうして。内容はヒポクラテス・ガレノスに始まり現代までカバーし、途中では日本の医学史も扱い、最新部分はDNA・移植医療・生殖医療に及びます。特にこの最新領域のカバーが見事な点が特筆に値します。

「まんが」と別に、著者の学識自体にも感心しました。本書の医学史は記述が正確で、私は不満を抱かず、むしろ感心しました。その例を1つだけ述べます。

DNAの二重らせんの発見に關し、ワトソンとクリックの業績以外に、ウィルキンスの立場、ポーリングとの争い、ロザリンド・フ

ランクリンの活動など直接の関係者はもちろん、さかのぼって「遺伝子はDNA」と結論したエイヴェリーや「塩基の相補性」を指摘したシャーガフの役割も正確に記述しています。“history”とは“his story”で、記述する人間の見解でしかありえないとの立場を明快にしているのも痛快です。

「偉大な業績は、1人の天才でなく多数の研究者の基礎や協力や時には争いで達成される」事実を、著者は基本的立場としています。その「数多くの研究者の参画」を正確に紹介するには、対象も資料も増えるだけ幅広い学識が必要で、そうした著者の才能と努力が本書を快く読ませてくれます。

その点で興味深かったのが、評者の専門の全身麻酔の歴史の紹介で、まがりくねった歴史を要領よく、しかもゴシップやエピソードもちりばめて上手に描きます。

著者は「モートンが好きでない」と述べていますが、この点は

実は賛成者が多く、アメリカ麻酔学会が「エーテル麻酔の発見者はモートンでなくてロング」と主張するのも、類似の感覚と計算に基づきます。私は知りませんでした。私が、ロングよりさかのぼって、クラークという歯科医がロチェスターでエーテル麻酔で拔牙を施行とあります。それでも、そのエーテルの麻酔作用をファラディが記述している点はさすがに落としています。

本書の頁単価は1頁6円強で、医学書の標準1頁20円はもちろん、一般書の標準1頁10円よりも安く、この価格設定にも敬意を払います。

● A5判 頁356 2008年
定価2,310円
(税5%込)
[ISBN 978-4-260-00573-9]
医学書院刊